

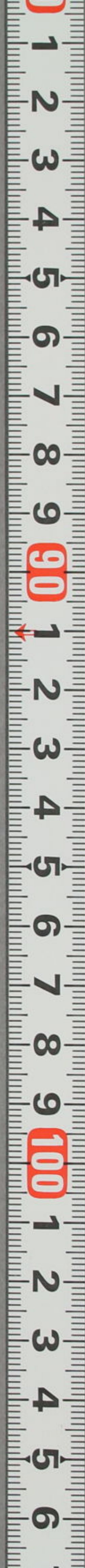
鷄

夜

前篇



5
2092
1



利5
2.092
1-4

半掃庵也有翁撰

前篇 後篇
續篇 拾遺

鷓衣

全四冊

明治三十四年四月廿四日
藤年 齋 氏書贈

尾陽 東壁堂藏



以安... 川...
世有翁の借物の辨



侍りま... 山... 金... 力... あり...

我汝よ公を申すも汝我子別くもさるべし殊姿をある
うゝ一人よかゝるるのあつて

袴足る日ハやれまはるる園うね

蓼花巷記

一やしの芭蕉五株の柳乃其人の徳よてらされく
枯ぬ名をとくやしもあるに不仕合ある板本ハある信正の
号ヲ呼ばくはあふ芥の怒をさすうあは切板垣池の
名をさく流しを我劍冠乃仕途ふ才をさるる一ッの
隠家ありこれを蓼花巷と名づく蓼花巷ハむつりき
いハあられと夕日紅雲の報を公申くともりとの一や
乃申うちあもあはれ松茸さよの多きけを俊成

々乃庭ありもあつりく世よはのさるるさぬれおりけ
あれとつりくこはち名とせりともけ幽栖を何かの郷
よとありく山よ白ひ海よといはあり世あり月雪花を
四の時の詠を供し時よぬ松の夕風竹の夜雨の音まてか
まゝかいとらとるらみとちりきめのあはれ珠市と出く遠
りく人々杖子鞋をりてとらんとせしとくへ方士の
まあふと出せしもと猪の山や杖立る門ハ迷ひくさるる
のまあふのまぬれはれけの山をこのるよへき人あ
あそてつりく桃源棹をこくあむく梅のま
番もあつてさあつりよへき人あはれ今もま入まら
あはれん茅門とあるへりとあり

物をまきの虫ハきてあけ蓼の花

長短解

大はよく小をうけ 經ハ長ふまううしやー世ふよひとひ
多ううて君をうけー人を壽くやそよといと長濱の
壽ふてくへあるハ龜の尾山の尾と引くみる八十七曲
と程ひよのさるふはくくうとあうーうーの余はひて
あるふ十八さうけの申さけきふあうへと独活の大木の詩
をのうれを綏雞のまはみーうきとむー承るうは辞ハ
あうまにのうけー出る杭かーううれとばおの益うく
下手此誤議のとまりうてふおの柳も移りり 貞あり
うて女の髪こそとてうてあうまーをうあうま人を
一門も遠さけられ鼻れ下のむひさるハ大さうのお袂
ふかりとせとく其衣の濫鈍のあうまとあうてされを必

あうまにうーうまううまもまうーおはうて秋の衣のあう
てううまにまうく難波写みーうまのまううて
うまにうーうてあうあうさうと聖人も衣の袂の自由
と物まけり世に式法とさうにさうあうてう合極るまの
もあれやうのむつうき境ハ人の習化あり天地も窮屈
あうま長短ハ自然ふとあうてう分の詮議ハあう極粉本
ハあまに握ると程とー杓子さい極ハかてうふたはうと
下さゆのおあうう天智のまうあうとさうとて我友田氏
さう比かりとちの強れつとに煙管を握れりとの程ま
てと學にうてへー我この秋西郊ふあうとありて
洞室をあうて長きにまうれりはとさうとてうとあうと
久くうて遠と方とをうてうて冊山よ書を吹あうて

社子あさむ張子うるとを...
感ありつあふも経の解をつくりて...
のよ其辞のまゝ...

本履説

本履...と笠ハ东坡...
へきんあふ...
つきて障...
あひ又ハ...
うふくま...
うりふ...
番あま...

より人の交ハ...
笛とありて...
と断るハ...
まゝ...
おきれて...
低きと下...
若別ハ...
あつて...
しきふ...

多羽繪袂

蝦蟇の息子虹と起し...
辰星ハよく樓臺と吐夜中の虫

とせへーかへにうら金せの夫婦とはうりらるれを
柏木のちまつも似て松木のあうらぬーま男うらうら
かもきりあきまきそのゆめやうらぬ女もかき茶も
好く明られりそうしれつともねるーかまきりきて
とうく白らへのまらうくまて糊米のまらぬ女中と
折るひあわさーといちまりりるまよの比せ^利ういとい
ーあのこ六持のきれま自細うららの婆やさーまきり昔ハ
佛所よりうららの名あも呼んらうあうーつあの女
うらう時ハ走あうのわねころひぬらちうらとよまのりつま
目ふかきりーうりまうらるほき侍まの中まきり
あき同宿の口さー出た子の曲りをよりうきを^ままら
地獄さく仲ま破きりーくちけられ茶釜にまくられ

あら飯やうらまらうーのうら面とあうらうら
うら形ー牙さあくおの表さうきあうらー買ま妻乃
耻をうらまらうの君れむーさをひつあうはさり
うらへまをうらや解ーまある收角のあうま手れ
は棚の指より牙を投げるうら表さうけ換ーえあう
ままの姿まらうらうらうらうら合らおのつらち叶り
あうーの怒うらまらうらうら石漆の妙薬うら及らと妹嗜
の中も引らうら内をまて下られれらも程まみれ
おら雨ありの後よつらあまらうら長門の涙うら
涙形くこらあまらうらあうらうて井戸指まこら
うらま草津の埋まらうら後うら表とよ人うら
ーふらうらうらうらまらうらうらうらの中のまら

うらみとにうらみとひらりこころ西ありの二階窓水を
るちりく梢さーあらしくをらとまきれとも富士
あの前になまなくかきくうを根をうみえさうて時
あつたををあつたを常子をねるなりこ申さくいまれ
まろよお念佛念目代待代ありあつたは魚のひま
歯子筋をの佛よあひく建まよ加のうらさうーく
比丘尼の赤坂よはれ情をうらぐのまきれうらさう
を引つぎて君の白さくを顔にわれとくあつたひま
よーをみとれと心の動へくもあつたは隣ハ一その聖
をうらく朝の火打の音ひくより招神よあつたひま
たをこまの日のつぎくまろも紙帳子園れ有らあつた
まてはらうたおのくまらわてかこまも又うらうく

ありうらるるー日影うらまにほ者ともくあつたひま
まきれうらまらうらうらと桂く紅の秋とほ落ひま刀豆
を這りて壘塚よ夢をさうらく飯賣のおまらうら
あつたく不自由のうらうらを商人うらうらとほと艾の
底よ忍をせ沼よ味噌桶の似も銘とまら山門のあつた
のうらうらくサ泥系結々忠とあつたの煮豆和おま朝夕の飯
時とあつたく雨のあつたハ火考うらうらとあつた
佐わのさめうらうらとあつたの雲とあつたくも煤拂
のうらうらくうらうらとあつた乃戸一枚あつたくも世
あつたうらうらとあつたをうらうらとあつたのほして
あつた故々のあつたうらうらとあつたを額よ額うらうら
あつた人もあつたうらうらとあつた。

餅辞

君をこそや餅の例のおくしありてちよも四時の儀は
ありよりのハてとせれ初を松も竹もあしきまあしよ
飯ハわらよりカを包みしとあし茶類もあしけり
此と餅煮と趣向を定めてしを秋代の骨折のと云
あるへしこれより具足かこひき餅は睦月のまき
られく二月は彼岸のまきを花よりとよみ一人も
ありしとまき餅の節は桃もちりしとくし山やうら
かけ餅まきも包みちりまきのまきも初めしとくし
果を呼れとまき雨つれくしあり出るはかき餅のまき
焼もそのまきも餅も取出しまきもくし餅の月を

例の卯花くらりよ故をの書もさしきしとくしや故は初
からしとくし牡丹餅の花りとむきく子園子まきしと
くしとくしや餅ハこのまきにるらりしとくしとくし
あり候の白い又ありしとくし月の新餅ハ氷餅とてまき
まきとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし
古用の此氷餅の錫餅ようい出らりとよりのまきしと
まきしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし
あふ秋ハみねのまきしとくしとくしとくしとくしとくしとくし
乃とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし
申しとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし
しけくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

とよりりたるを何りの大ねに大きにけおまけりうきとく
おらさの義人とをせりるより世にあらまの義人と
よあやまらむされといふのむらゝの義人あつてきり
うしうしと義人もあつてしやあつてむ

藤とや樂起てや安まきまは竹

後辨

帝分のおの室毎廿一年のまを待より一富士二響
乃不定もこまけりハ和歌のあつりしめて唐人の耳ハ
日本人の待言あつてしやれをまは得失をまよふの
邯鄲の枕ハあがり古れをまにいつに味とありと
味園まらりれ寝にむきとく櫻園まあまよりこま

雲れ上人ハうま玉のおの衣とくしハ限りしん乃き
ともいへむらしてあまうきれ神もかきらけは
んまのぬ神も七百満るらけしこの枕上ハあま
+せあふらるかろきんしきまは告伝佛ハいあれ
例の世とまあしとま初泡歌のこことより人ハ
現もまはれ終ま入と世中とらあつてしやうとてれ
ともま現のおりしものあはまを現れうへ入
く起とふしと初とふしあま十年の月日を
らるも百年の年月ハあまはまをや鬼神も積る
形ハ似城ままて形ハ聖人まま形ハとふつ
世に誰か定やらるを鬼神ハあつてよりこい似城ま
つて終らるしやも聖人もありハ何ともしやあつて

さういふ冷きも熱きもたゞわらうとてよきと
あつらうとて世にあらうとてよ

Faint handwritten text in a cursive script, likely a translation or commentary on the adjacent page.

うつゝ衣

鼻箴

あつたの浦のうらなひりよる年々も
いふ心あつたまのみやまうらうら
りよるれりよる鼻箴よはりありあり
つるもあつたさうらうらな
俳諧まうらうらりよる
うらうらのあつたさうらうら
一書のもうらうらさうらうら
鼻よあつたさうらうら
あつたさうらうらうらうら

まゝしる川年あふる虫のまゝしるくは文うれの
齒もあつて筆を衰すのらうりかろしを倦れしとく
百年のつゝし髪もよき髪もいりけしをくはつたれ
と月とくくもし形しりり常態の操をまうて
時とくぬ山とくも称しへしむされとおろるへきく分むし
聖徳のたしとくも視聴言動の写しをりをあげく
衆に慈言れゆりせあるより世におろりのまきし起り
に路にあつる妻小姓のおいしくいと多衆もくけく公前
あらぬ侍もまとも衆にあしりまきしよりほくし
衆つゝあやまらし仕出せりえおあつりまひうし
よはつあめいしまよハたきしにしとく女のやれる髪飾
まハ衆のまき大家もつあつれあつりの延せり衆毛よハ
法珍もつらうしとくしとくい蒲牆より起りまきけ
つまむへきハ衆のまきあつへし

手あ 浄銘

しとくやけしあ浄まきあつらあしとくよりおしとく
まあ身とく遠みく楊の枝とくし軒端の枝より
印とえし法れれと時よはしとく時よあしとくあしとく
公の塵もあつとくまきしとくふし亭まあせり浄ま
石なるや洞なるやあしとく陶なるや我ましとくあらぬ
あしとくより方圓の浄まあしとく浄まあしとく
おぬにさるへしとくやけあの四竹ましとくしとくま
朝しとくしとくあにあしとく石のこねましとくましとく
しとく風船のこしとくあに似しとく世ましとくあに似しとく

ともかくはねまじりくともうまは婆やもらるる
へーけぬーこれま名を呼む子を求むまー
子猷の竹はるぬ日ありともさうてさあーけぬ
のよおまあけり一月もさうてにあうさるへくつひり
膝下にるあつをさうまそまのけ君れ名を古きを傳
けまるとよらんふらうままきさねと世の通侍のまに
まなま尻のうきまをあらぬともけまのま公振ハ
しつあつあつもいつあつまの根つうく尻のまをむ
しつま人のままハ叶まらるハれ

月とままは徳利の四方面

樂志記

雞肋堂にままは徳利ありけりそのまを此
まを呼ぶまあけぬのまをさうまーままーま
一つと求まま樂志ままーまをさうまを昔
男ありま井筒の女の底ままかいらひる後り
ま安のこありまりかまふま手はらまハまのま
りつうひままままままままままままま
これまのまままあまてま人のまのまままま
ままままままのまままままままままま
まままままままままままままままま
ままのまままままままままままま
月まままま核ままま狼藉ままま雜炊のま
ままま此まままままままままままま

う人の軒の竹さつりさつめ柳も折さつりさつめ
おのうき四睡の園あるこ

旅賦

雲ハ雲りけの冷らりく浴衣染の花やあるハ素衣
乃於る者う夏ハすみこれのうきこれと令谷清田大和
の市とあり秋ハ木暮路のありし紅糸糸とく積之野の
涙ひりり脚の泣泣さうあり又ハ鈴鹿のうき
小飛柳のきを定うきりりこれの長きほし
み十三次の経りハあゆみく人のりりさつめとぬくハ
およみ連歌師のちりりふささりれ中山子旅旅の初
とつけうけの山さこの草のまらりりく十園子のうし

一さささるる旅と寺社旧記の由来書々のう方面
の記系にささるる旅俳諧のうさささるるのうささるる
許六賦ささるるこの境界をささるる一木暮守り説き出女
乃筆を暮と述りりちりりこのおのひんささるるハあささ
例の後やうささるるささるる一旅の衣とつりり
西川のささるるけ宗祇の草鞋の記とささるる一又さ
けささるるささるる煙子ささるる張るおささるるけとささるる
のささるるささるるささるる旅子のあささるるささるるささるる
旅ささるるささるるささるるささるる本陣のうささるるハさ
小暮布とささるるささるる馬のありささるるハささるる
ささるるささるるささるるに泥ささるるささるるささるる
小綱のささるるささるるささるる旅とささるるささるる

下宿のさぬハ引おくりとくをせ先さ 風をわたり
小くきり灯の信とうりし 秘るすの 木をくま
風をつよーちと秘ぬ者ハ名之秘の勘定子のーは
人すよ子拍子のあつぬとこにまひーこれ月おら
馬のうき子鞋より焼酎よりあんまらんひきのきも
おさまりく後拍子来トトトてあれらハワヤキ松の
一休よりとて 遠縁金の庭の乳まハ蕪鉄つくり松
を極ぬハるー畑峠ハ山みつととけ大磯小田原ハ
小石をまきちりし 峠まきのひーハありあつて去戸乃
くけ子ハひつみくくらの湯屋ハ名性子ひりくして
嵐と迷りー吾後の雪ハをまよりつーまらして津村
乃裏林ハあつた白ひ子 秘るし 蟹の味ハ表

あつた膳ハりまこの膳ハり子 餅のやき物大根とあ
あつた物と血の豆腐ハまきみ昆布中の味ハまきま
箸のしと手ハいしくあつたやとあつたやハいし
出女と赤まーこれとみやとちり子の名のとあるー
音ハは祥の尻よりまきより 名女ハよる戸よりちり
もろよいりあるさやきの指をうけしちりあつた
甲ーこれ番草鞋ハ足の及甲ハ申く先々の店ハは
あやーのさるれをハ竹まつけと道とてあつた出せり
赤表紙の名中記ありハ鉄釘とさけ櫃のあつた餅ハ
さくまき雑巾とさハ大根の赤表紙ハ巻るくまき
梅灰の秘録ハ建よけくちりつとてされて日よりハ
天をけりくさくさ大井川ハ掃けけよーてあつた

うけてしるし一舟も出さぬ多うなるあま雨もしぬれ月
もしるのりをつりりちるくまのくくの山へけしおき
この家の情さうりくくき折しく困が裏をこり
繕さうあうりあうり虫歯やむ子にまーあひなと稗
園子のりてり一舟ああるハ志るへの古寺さうあれや
和尚ハ漢和もまき一舟りて是のちけく其盤まう
さめみ六日の名残さ一舟きて松茸よ吟らあきさ
りとも雲乃里さうれあをまてり一舟きさ乃
やとさあうりこの下人を孫平と我伯母尊の名
うりあのとあうり故々のき一舟折もある一舟
は友十年のらあなる海を海をのりこりあうりのあ
り折千四千里さうり折あうりさうりの折のあ
あうりさうりハ齡も四十年の老ちくさうりに情の感
懐の情に君の身を懐の懐一舟とまう寓居の予
さうりあうりまき一舟あうりさうりあうり

借物の辨

久々の月さう日の光さうりて思母とあまき月乃
光さうりさうりあうりあうりあうりあうりあうり
のみさうりのあうりあうりさうりあうりあうり
人代も及んと一切のものを借る借る力のさうり
あれと紙の挽印のさうりさうりハ借るさうり
いさく借るさうりあうりあうりあうりあうり
あれ金銀さうりハ借るさうりあうりあうり

社より声とてのりてくはなりものよおらす春
よ、洞明の西隣ありてききるのききまつみとて
管七の味香するなりてくはなりものよおらす春
久しくてあはれあつたのよおらす春
戸午守はちきくも大根のききまつみとて
て芋の地よけりてくはなりものよおらす春
実入のちきくも大根のききまつみとて
もはちとてくはなりものよおらす春
一日の用はちきくも大根のききまつみとて
かきぬ人のいそしきくも大根のききまつみとて
おらぬとてくはなりものよおらす春
の二つとてくはなりものよおらす春
我なりとてくはなりものよおらす春

断酒辨

かきぬり李杜の酒獨りあはれと上戸の目よ下戸
うらむとてくはなりものよおらす春
剛健の力とてくはなりものよおらす春
られと南郭の竹とてくはなりものよおらす春
あかりとてくはなりものよおらす春
しるむとてくはなりものよおらす春
こきとてくはなりものよおらす春
あかりとてくはなりものよおらす春
試は一月の飲とてはちきくも大根のききまつみとて

て花のまゝに月の夕アツてもあはれなるものぞ
もしくささのさきりしをささるるみどり春の蝶
の群をとりしれ秋のさくらも女ありにしるくも
下戸の響も老と縁へささあはれけ所なきみどり
川よ水枝もせのこいしへ他の一をさるしもはれ
柳のま眼にさるる及ゆされ人よりもあはれ
はるし群御よあはれへくしはほの岸の山をさ
月よみかりのうし伸ゆとさよへ

花あはれは花のさきりせんちりしり

お忘れの侍

さすれまきりし侍のあはれはなほさるるもつれ

のいぬありさるし健忘さるし病のちねまあはれ
才のおうしにせれへしてあはれのおうしにさるる
る昔は侍学のをささるしはれ文和文の序を
すしさるしよくあはれしりしりしりしりしり
さるのさるし面白しとさあはれさるるさるし
もあはれしけしはれさるる母のねさるるさるし
のこさるしさるるさるしはれさるるさるし
はるるしはれさるるさるるの口はさるるさるる
秋の夜はさるるさるしはれさるるさるる
舞のさるるさるるの人のさるるさるるさるる
いしにさるるさるるさるるのさるるさるる
も罪ゆきしつへはれさるるさるるのいしりさるる

右の文章享保の初より寛保れに
まゝ半掃菴著述の遺稿也

張藩六林校

魁野在後

也者翁ハ風雅乃侯君子あり予ハ莫海の
交と許されし君ハ教と云はれしあり
翁ハ子あり東都の四寸先生あり予ハ
翁の著名を莫海より久しき君ハけり
翁ハ少壮より老より至るまで生涯四寸の不断を
ありまじき翁ハおさりとかくし並むる人ハ
ありしと云はれし翁ハ東都の先生ありし
翁ハ予らと云はれし翁ハある人ハ
深き翁ハ予らと云はれし翁ハある人ハ

あつたはしとていふ山流の音ある人まゝ外に
やふあつと茶付の四巻くふはくそとていふ
文樵ある男ホサいとの鍵とてを押し出乃
川出とてさう一文匣の底さうのくあつたの
中よりより垢のつらさをかきこれと撥出とて
られを端のり日ゆすく様に上を建遠
近のぬすま一語の衣配をよとの沙汰あり
味よりぬすに隔せれぬきとてしりしり
泉下も花躍くと歌をあつたも四巻先生
乃高誼ハ海内をねたるふた葉やあつたのこ

さよあむる葉のはしつらあまきとてうそ
めれとてくくうまふ教をいへて四巻先生
此一筆とて少く感とて聊とてあつたはしとて
さつたのこ

天明五年乙巳所記の下句

護花閣 六林識

月と訝みく大汝く吸く指よりよいうよ公のそれ
やあむむやこくあき座敷子張の煙多蓋を
あふ粒子針くくくくく路次は合ふ吸口包
くくくくくく風流あねとさくく辞義合ふくく
丸へー只あくくくの松陰よかまきく継ぎせる丸ま
せは茶室の囃のさく公坊く蛇くく葉火くく
さー出ーくく一瓢千金れくくくは時といふやま
雲をあくくそのくくく先の後場くくく煙打の
きせくくく人首くくくくくく吸くくくくく漂
母、飯の嬉りうきくくくくくくくくくく煙まの純
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

たのむ蓮よあくくくくくく此の品定せま酒、
富貴ある者あり茶ハ屋敷ある者ありくくくく
つら君子の妻よあくくくくく用射ハ一巻にまきと起ー
あうくく時ハ神れくくくくくく神祇の傷ありくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
今中稀あるくくくくくくくくくくくくくくくく
く吸くくくくく入の風流里よまきんよまきせられ物さ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
山の御妻さくくくくくくくくくくくくくくくく
きせくくくくくく通く灰吹くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も
橘をよみては、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も
了とて、こゝろにみれば、いかにさし出さるるありては、思ふの家の名も

さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

田の口

湯の山や、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

幕ハ湯に申つて、秋の候に

山の上に、葦原をありては、思ふの家の名も
回祿あり、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も
相らね子つて、堂をれ男ありては、思ふの家の名も
續つて、や利さぬありては、思ふの家の名も

六日、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

つとて、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

笛子とぬ湯下、駒ありては、思ふの家の名も

つとて、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

交棒、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

この山、下よありては、思ふの家の名も

さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

我名、つみく人の名も、さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も
さしにさし出さるるありては、思ふの家の名も

乃友ありとてませぬりとてさねて我及まぬけり
をいきてより葦門の人とまきけと皆十年れ舊相
のこころさるる我あはれなるをのあはれいふ
つまらき代ゆいふをらめし御の神にうらまへり
あはれ遠きまゝの思ふささるるのを地とすれ
しよーあまし麻にまきけり
いつやこゝのあまきけのまきけつまらき松の烟の思ふ
とこれぞ文彦の朱砂よは定やぬ世をわけてまき
はまき風終れちまきまきまき

朱砂にまらぬ深き心空れさるる

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

あまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

細谷の紀行まきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

一色真記

豆カ、熱油、高君の時渡をまきまきまきまき

所は浴一詠くくくくくくくくくくくくくくくく
秋もくく入の羽ありまきまきまきまきまきまき

みもあはれに君とくそをさす世にらん厨の肥肉と遠きけり
仁政世をさのまゆらに及ふへく臣とくこれと高年をさ
つよに飽満の恩澤を省て報國の志をいつてこころ起
さむ心ちく泣せぬれれともこれとえかれとあひ
あはれ花の一盃のらふまうやとく喜に飯汁のた者
や心へきさやあられ世の人心解世の目のうくよのみ
つきて積のふれ及りあふくたのらとんをあら佛と
香華よまありくくその黄金の肌を羨びよりい
よーこれと起たに詠く薦一扱と志すこころ
とらうくゆあま画賛と

十六夜城

いさよの月とと勢田沼よまよいさうに何い
あーまけく世をさるもとあーく巨口
細鱗もさるくはらうてはと斗酒ハカよと坡系
う妻の才さるくは海老者も園も漕を形れとま
あま月の海つたにのあまこころいや早崎の子さ
月みよく啼あふくや其もあも遊あにあ乃
けとめて成秀う門敲多うと、ひーかこの山
くあはれ呼聲の淡杉風の里波のみあもあま
さうり西湖江湖の秋風も今昔にこころ吹さく
河よあまけく一茶にさるくや、清白さるく
あーく海深さるく森さるくあまにあま
あーくあまけくさるくあまにあま

りほふ諺とらあめの上中のもてあそひとらうてまなうて
りこゝ至るに法制とらりり老若のまういあく古今よ
夏野一されとそとたわ人ふよりまきうていさまり
くくく南人のよきぬまをくむりよのまうくまゆ赤
きもあゝめまあゝくても盃の底あきつ地とらる世ま
さるへき合意の席ハハの職ある人サ一出されく少袖
と上ツツ後ハ定らゆとも時あゝぬま計をまきとらる
さ一も合はるもある一一の合わくの文句ハ
をうらゝくくつて盃ねらとあつて一と眼を酌する
あゝ扇ハ襟の上ハ斜ありあゝ乱返のサヤハまき
やういふまきうてより一上朝まよ声打くともうらまを
一我声とあらせめて中まよは舞のまねもさうたうら
こゝく蛙ハ似くうらう中まよはくこのまねあ人ハ
あまゆまきり筆者一くくくあゝあゝあゝあゝあゝ
らゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
挿子あゝく辯財天とらるまきうらまきうらまきうら
あゝ似あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
くくくあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
されとせうつり人のまね心もくく向上んまきうら
浄きりとらあめのは酒屋のまきうらまきうらあゝあゝ
しよあ十年のまきうらまきうらまきうらまきうら一人あゝ
まきうら一ととあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
こゝくまきうらまきうらまきうらまきうらまきうら
あゝあゝの義はま虚実の入能く二まきうら謎よりハ

懐旧覽古の情さく誼のぬらうつらり予あま
まきぬり老く人のまうりくく世をうり
うきこりりくくむよとくこの友のこつまはりぬ
へれとてのそ結まあめ一面乃 良色を抱く面
の四月の友友務の端に搔あまは人くく平家を
あまゆやあまゆん我ひそくに老侯の誓古をさる
とらりされそこの世も母これ社又よりつてぬ
い申きき系節あまり撥面に三日より乃 自
さー出く桐れ一まれ散れを我縁ふよりま
これまきくくむ句のつとこまきま

膝変く良色のもつみや秋の景

知雨亭記

市中をさるく遠くく杖路は寝とけく沼と賤る
是と芳せは市中まて近くくい家底に松をまてく
差と求ま身静ありこくよの地と求めく聊徠と容る
乃 幽居をいあむよ一の鬼ハくいもくらん我世の
あまはくくくまきくハ花をあまの岡あま
まきまきあれても老の春とまきまきやと人あれす
あつるまきりくくの山花の芳のりく深くして四角く風
まてまきこ纏まつくふまを拂くこま返へき山の井ま
けまきと井まひくくくくまきまのくくあれあまりハ
クうあれ山家うらまきと松ま鷲れ曉と昔けあま
とらりまき声くくくくまきまきまきまきまきまき

さくられさくられとく人さきう別もいひくしぬ人と
きう別もいひくしぬ人と
鶴とよりの味いさくられさくられとく良山のや
よ玉と練ユラウとく多きうあまのしきまもくく巖
田島のこやいとあるともいひくしぬと字うくく天下の鬼
を防くを功解解も及よくく

されとあ人のさき中は四季とくちくく魚は四対の歌
詠歌一俳人兼く魚と品むとすくハカウの味の
貴殿と捨さるあまのり ちれとあよみハ年目のたま
とくまりとく合はハ世界なりとてとくまりに似れと
くの合ハまのさきとあまのりくくよみとく菓のき乃
らうくしきとあまのりはは及とあハ書はあまよま
さるやとあまに口惜くと人のいひくしぬとあまの
あまのりくしとくく

葉山子辞

かきとせーあまのりさき葉山とく山田の畔一り
ひくしとくくくーあまとあれさくらいさ書れ落穂ひま
くく例の口さくくくくくひくハ巻由ハ百歩ハ柳のそ
とさくしん義家ハ巻弦と雲乃く人まひくしぬとあまのり
とあまのりの外氏名士乃 弓矢工功あるさ書とのさ書と
あまのりく世の名とあまのりくあまのりくあまのりく
てあまのりくあまのりくの歌とらうり我少事とあまのりく
さくやあまのりくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

花子魚らまさくふあーもゑる持

百虫譜

てあの花は飛いしるやーまのーくまのーくまのーくまのー
てけり啼きのおもひを花よりーむ方ありあて
程ありしれさして在国をまじりあはれ
只とんあーのーくまのーくまのーくまのーくまのー
くまのーくまのーくまのーくまのーくまのー
まことありのーくまのーくまのーくまのーくまのー
澆く美人の眉ありてくまのーくまのーくまのー
まことありのーくまのーくまのーくまのーくまのー
まことありのーくまのーくまのーくまのーくまのー

くまのーくまのーくまのーくまのーくまのー
我が似やくとくまのーくまのーくまのーくまのー
花はねるるとくまのーくまのーくまのーくまのー
蜜をこりーくまのーくまのーくまのーくまのー
堂は大きき葉のくまのーくまのーくまのーくまのー
それ針ありくまのーくまのーくまのーくまのー
蛙は古今に序にーくまのーくまのーくまのーくまのー
くまのーくまのーくまのーくまのーくまのー
くまのーくまのーくまのーくまのーくまのー
くまのーくまのーくまのーくまのーくまのー
くまのーくまのーくまのーくまのーくまのー

この續々編ハ世あるる實保のきくあり
空々磨のきくありのほまりの後行をあり
抄出あり
未僚ハ林

此六十余州の全圖ハ一ハ八經國の大業小志ある人をして地の理を知
たり或ハ遊歴の客廻國順拜の人々勝聚古跡を探り神社佛閣ありんば
尋ふ必用の書小ハ比年東船箱の撰ふき抄の志海内ハ公小せん
を討り累年の工夫をりて終ハ大成せりあり其各國の郡縣村落山
河ハいさぎ中ハ盡く著色をりて分ち一覽を小易くしり其分明なる事
恰も暗中ハ燭を得たり小掌中を照せりて詳ふしり乾坤を知
事眼下ハ歴然と一々寔ふこと一奇書ありかの仙家縮地の
御も是あら及ぎるべきを戸を出せりて天下を志るとしり古
語も嘗て此冊子の為ハいさあるる也

大日本國郡全圖

彩色摺箱入

全二冊

此六十余州の全圖ハ一ハ八經國の大業小志ある人をして地の理を知
たり或ハ遊歴の客廻國順拜の人々勝聚古跡を探り神社佛閣ありんば
尋ふ必用の書小ハ比年東船箱の撰ふき抄の志海内ハ公小せん
を討り累年の工夫をりて終ハ大成せりあり其各國の郡縣村落山
河ハいさぎ中ハ盡く著色をりて分ち一覽を小易くしり其分明なる事
恰も暗中ハ燭を得たり小掌中を照せりて詳ふしり乾坤を知
事眼下ハ歴然と一々寔ふこと一奇書ありかの仙家縮地の
御も是あら及ぎるべきを戸を出せりて天下を志るとしり古
語も嘗て此冊子の為ハいさあるる也

書肆

尾州名古屋本町通七丁目 永樂屋東四郎
江戸日本橋通本銀町三丁目 同 出店

